

2017年5月
1120号

百葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5
(一冊の会研究室)

アジアはひとつの世界展 ～一冊の会ゆかりの地にてタゴールと岡倉天心の展示会

バングラデシュの芸術家が描き、茨城県北茨城市に寄贈された、インドの詩人であるラビンドラナート・タゴール(1861-1913)と、日本の美術運動家岡倉天心(1861-1913)の肖像画が、5月21日から茨城県天心記念五浦美術館(同市)でスタートした「アジアはひとつの世界展」(5月28日まで)に展示され、多忙な中なんとか時間を作り最終日に滑り込みセーフで大槻会長と小山副会長が訪問し、鑑賞されました。この展示会になんとしてでも訪れたかった大槻会長。2011年の震災直後、被災地となった北茨城市にも一冊の会は支援しております。震災で流されてしまった岡倉天心のゆかりの地の「六角堂」(波を見るためのあずまや—天心はここで波を眺めながら瞑想にふけり、時に海に釣り糸を垂らしたという)もみごとに復興されており、震災後6年の長い月日と復興に寄せる被災者の強い絆を強く感じ取り、天心が魅せられた青く輝く母なる海を臨みます。

この北茨城市は一冊の会で勉強しました風船爆弾を制作していた地域としても言われています。その地は「アジアはひとつの世界なり」と平和を謳っています。



六角堂から臨む風光明媚な景色



石碑「あじあハ一つな里」 平和を願う心

タゴールと岡倉天心との友好

岡倉天心は、東京美術学校(現・東京芸術大学)の設立準備や、海外での日本文化の発信活動など、近代日本美術の発展に貢献。40歳代に太平洋を臨む自然豊かな北茨城市五浦に活動拠点を移し、海外を歩き来しながら生活をしました。1901年にインドに渡った岡倉天心がタゴールと出会ったことを機に、芸術や思想について議論しながらお互い交流を深め、岡倉天心没後1916年にタゴールは初来日し、天心ゆかりの「六角堂」を訪問。

タゴールの来日 100 周年を迎えた 2016 年に、バングラデシュの芸術家のシャジャハン・アハメド・ヒガシ氏が肖像画を制作。タゴール氏とゆかりの深い北茨城市に、その後制作した岡倉天心の肖像画と共に寄贈。今回「アジアは一つの世界展」が開催されました。



一冊の会とタゴール ～相馬先生ゆかりの地で

タゴールはアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したほか、バングラディッシュ国歌の作詞・作曲。アジアを代表する“詩聖”として知られています。そのタゴールの像が軽井沢の碓井峠の見晴台に建立されています。一冊の会永久最高顧問である相馬雪香先生も軽井沢に来たらタゴールの像を見なさいと薦めたとのこと。タゴールは 1916 年（大正 5）に来日の折、8 月に軽井沢を訪れ、三井邸に滞在し、日本女子大の修養会に講師として招かれ、学生を前に「祈り」について講話を行いました。像はそれを記念し、タゴール生誕 120 年にあたる 1980 年（昭和 55）、日本タゴール協会等によって建立されました。背後の壁に、彼の言葉「人類不戦」の文字が記されています。銅像は風光明媚な峠にあり、軽井沢を訪れる際は是非立ち寄って頂きたい場所です。



軽井沢町ホームページ参照

アートの中で日本を発信し多くの人を魅了し世界との懸け橋となった岡倉天心やタゴールと、草の根の活動を継続することで、その真心が多くの人の心を深く魅了し、未来を切り拓き世界へと発信し続ける一冊の会の活動と重なる部分があります。今後も友好の輪を広げ“世界と日本に平和と友好の懸け橋”を築く担い手となっていけたらと思います。

世界はひとつ — 平和と友好の輪を、皆さん一緒にその担い手となりましょう

文責 城杉 清佳